郷土研究
伊丹公論
復刊
第30号
通巻 49 号
年３回発行

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-4
☎072・784・8170

編集
伊丹公論編集委員会

4/22

「歴史・文化・芸術」を伊丹から全国へ

伊丹ミュージアムがグランドオープン

市立伊丹ミュージアム外観

伊丹の中心市街地、宮ノ前地区にある文化ゾーンをリニューアルした「市立伊丹ミュージアム」が、いよいよ令和４年４月22日にグランドオープンする。今号では、同ミュージアムの担当が、その概要や魅力・注目イベント等を紹介する。

市立伊丹ミュージアム誕生

旧岡田家住宅と旧石橋家住宅からなる伊丹郷町館や美術館、工芸センター、柿衞文庫が集う文化ゾーンは、文化都市〝伊丹〟のブランドイメージを発信する観光拠点として、長きに渡り愛されてきましたが、近年、施設の老朽化が課題となっていました。同様に、市役所の隣にある博物館も、築50年を迎えようとしており、老朽化が顕著であったことから、これらの課題解決と、施設の更なる魅力向上を図るため、博物館の機能移転を含めた整備を行いました。これにより歴史・文化・芸術の新たな発信拠点「市立伊丹ミュージアム」が誕生します。

俳諧・俳句ひろば（イメージ）

「酒と文化の薫るまち」

江戸時代に酒どころとして繁栄した本市は、清酒発祥の地であり、文人墨客（ぶんじんぼっかく）が訪れる文化の薫り高いまちでした。伊丹ミュージアムは、「酒と文化の薫るまち」を基本テーマに、美術・工芸・歴史・俳諧の各分野におよぶ収蔵品を中心とした子どもから大人まで楽しめる様々な展覧会や講座、イベントの実施、伊丹の酒造りを伝える文化財建造物の公開など、多様な学びと体験を提供します。

さらに、中心市街地にある好立地を生かし、周辺施設や店舗など、まちと連携した事業を柔軟に展開し、伊丹の魅力を全国に発信します。

無料ゾーンでも楽しめる

重要文化財である旧岡田家住宅では、建物の雰囲気を生かして、伊丹における酒造りを紹介する展示を新たに設け、所蔵する「日本山海名産図会」をアニメーション化した映像などで、分かりやすく解説しています。

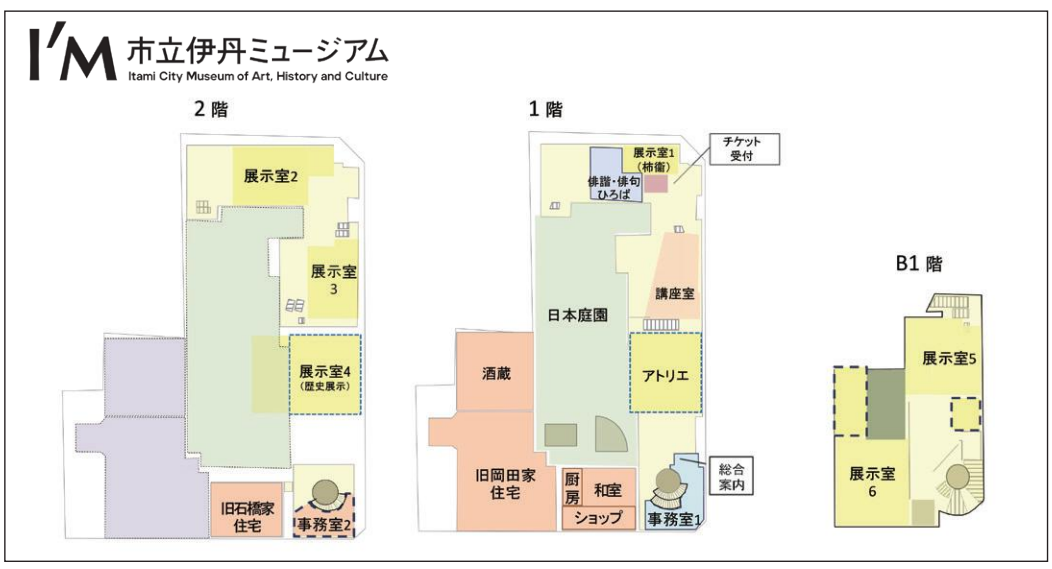
また、日本遺産として認定を受けたストーリー、「下り酒が生んだ銘醸地　伊丹と灘五郷」を紹介するコーナーも設けています。

常設の歴史展示室に入るとすぐ目に入るのが大きなスクリーン。ここでは、本市の歴史を動画や写真、アニメーションを使った映像で分かりやすく解説します。

また、俳句やくずし字をクイズなどで楽しく学べる「俳諧・俳句ひろば」や、ジュエリー、手織、陶芸などのものづくり体験ができるアトリエもあります。

施設内にある日本庭園は、日本を代表する作庭家、重森完途（かんと）さんにより造られ、その流れを汲む重森千青（ちさお）さんによって一部リニューアル。引き続き豊かな水景表現、枯山水を楽しむことができ、新たに設けたユーティリティスペースでは、ヨガ講座や茶会などのイベントを実施する予定です。

これらのゾーンは、無料でご覧いただけますので、気軽にお立ち寄りください。



各階の案内図

開館記念イベント開催

開館を記念し、４月22日から24日の３日間、多様なイベントを開催します。酒蔵で弦楽四重奏のミニコンサートや、江戸時代の伊丹の酒造業の発展を守った近衛家当主嫡男と伊丹の酒造会社による対談を行います。

また、型染ステンシルでコースターや布バッグ作り、銅版画プレス機を使ったエコバッグ作りなど、ものづくりの一日体験や手描きの絵が画面上で動きだす紙アプリも準備しています。

ワクワクの記念展も

オープンを記念し、特別展として、長年愛されてきた絵本「がまくんとかえるくん」誕生50周年記念「アーノルド・ローベル展」を開催します。

本市ゆかりの俳人作品の展示「酒と俳諧」展と、酒器で有名な丹波焼や丹波布などの工芸品を集めた「丹波の工芸-杜のいろ」展も同時開催します。

夏には２０１９ニューヨーク・タイムズ最優秀絵本賞を受賞した人気作家、ヨシタケシンスケさんの絵本展も開催予定であり、見どころです。

新庁舎ともコラボ！

11月の新庁舎開庁に合わせ、設計者で世界的建築家の隈研吾さんによる講演会を開催予定。また、新庁舎の建築模型の展示、現庁舎の緑地広場にあったクスノキを使った三沢厚彦さんと棚田康司さんの彫刻作品も、開庁に先駆けて伊丹ミュージアムでお披露目する予定です。

その他にも、分野を越えた展示「ハイブリッド展」や「総合所蔵品展」なども予定しています。

市立伊丹ミュージアムでは、多彩な芸術文化を市内外に広く発信し、芸術文化を通して「人」と「まち」をつなげる活動を行います。

ここに来れば、今まで知らなかった伊丹市の歴史や触れる機会がなかった文化芸術にきっと出会えます。

新しくなった伊丹ミュージアムにぜひ、遊びに来てください。

公式ホームページはこちら

「郷土研究伊丹公論」は、私立伊丹図書館を開設した小林杖吉（筆名「丹城」）が、昭和11年（1936）1月20日に創刊し、19号まで発行された地域紙。ことば蔵では、伊丹公論を73年ぶりに復刊し、伊丹の歴史・文化を全国に発信するため、市民と共に発行しています。

第9回 日本一短い自分史

「ひとり部活」大賞に広島市の種田さん

ことば蔵はこのほど「金メダル」をテーマに募集していた「日本一短い自分史」の大賞に、広島市の外国語スクール経営、種田潔さん（70）＝写真＝の自分史「ひとり部活」を選んだ。

日本一短い自分史の募集は平成25年度にスタート。9度目となる今回は9月1日から募集し、市内外から過去最多となる402作品の応募があった。

審査員は伊丹大使の坪内稔典・佛教大名誉教授、湯浅俊彦・追手門学院大教授、中周子・田辺聖子文学館長の3人。

秀作入賞者は、大阪府豊中市の安藤知明さん（80）、岐阜県中津川市の林一美さん（90）、東京都杉並区の後藤里奈さん（33）の3人。

大賞作品の全文は以下のとおり。

◇　◇

学生時代に陸上部を途中で退部した私は57歳になってマスターズ陸上の円盤投げを自己流で始めた。

私が円盤を投げるのはほとんど人がやって来ない河川敷。広々とした原っぱを独り占めしてのびのびと、かつ一人寂しく投擲練習をしているが、時々小さなドラマがある。

川べりでサックスの練習をする高齢の男性の吹く石原裕次郎の夜のムード満点の「夜霧よ今夜はありがとう」を聴きながら、ミスマッチな雰囲気の中で投げることもある。

秋でなく春に草むらで鳴くクビキリギスという名の虫を知ったのもここだ。

川岸の桑の甘酸っぱい実をそれとは知らずに口にし、（練習後のいいデザートを見つけた）と喜んだのもこの河川敷だ。

5年前には散歩にやって来た無口なビーグル犬が私の近くに座り込み、飼い主が引き綱を引っ張っても両足を踏ん張って動こうとしない。見れば私の投げた円盤を目で追っているではないか。

円盤投げが好きな犬と初めて出会ったのもあの原っぱだった。

自己流ゆえの遠回りもあって記録の伸びはカメの歩みのように遅々としたものだったが、当初はるかに遠く10数メートル先にあった全日本マスターズ年齢別の優勝者の記録が、いつしか指呼の間に近づいてきた。

競技を始めて10年後の2018年、鳥取で行われた全日本マスターズ陸上選手権の65歳代の部の円盤投げで私は一位の表彰台に立ち、メダルを首にかけてもらっていた。

若い日に部活の落ちこぼれであろうが、自己流の円盤投げであろうが、カメの歩みをひたすら続けておれば10年前の自分が考えもしなかった場所に立つことが出来るという「積み重ね」の重さを知ったことは、マスターズ陸上を続けたことで得た最大の収穫だった。

今年も4月になるとあの河川敷で投擲練習を始める。若い時は2年しか部活が続かなかった私だが、70歳になった「ひとり部活」は15年目を迎える。

◆　◆

種田さんは受賞後「近所の広場の隅に小川が流れていて、小学2、3年生と見える男の子が二人、たも網で流れの中を探っています。寒さの中、ズボンが濡れるのも構わず、時がたつのを忘れ、夢中になって遊んでいる少年たちに黄金の時間が流れているようです。私もホームグランドの河川敷で、時のたつのを忘れて円盤を投げられる桜の4月が待ち遠しいです」と話してくれました。

郷土史こぼれ話 30

すごい！　有岡城が直木賞の舞台になった

芥川賞と並ぶ第166回直木賞に、米澤穂信氏の「黒牢城」が選ばれた。

作品の「黒」は黒田官兵衛、「牢」は牢獄、城は惣構の「有岡城」だ。審査員をうならせた異色の戦国ミステリー小説。今年は、全国から伊丹へ訪れる歴史ファンが多いのではないか。私は伊丹酒で乾杯した。

物語の舞台となった有岡城跡

天正6年（1578）10月、有岡城主荒木村重は天下統一を目指す織田信長に敢然と反旗する。明智光秀をはじめ多くの武将が説得に来るが、村重はゆるがない。最後に来た官兵衛の村重への挨拶は「この戦、勝てませぬぞ」と言い放つ。その官兵衛の才知を高く評価していた村重だが、やむを得ず彼を幽閉する。

そして織田軍との籠城戦のなか、城内で奇怪な事件が続出する。その解決にいつしか官兵衛の知恵を、時には酒を酌み交わしながら、借りることになるのだが…。

あらすじは以上のように展開するが、作者が一番書きたかったことは何だったのか。終章には、生涯の戦国武将の体験から、「黒田家の心得」をこう遺す。

―神の罰より主君の罰おそるべし。主君の罰より臣下百姓の罰おそるべし。

―臣下百姓にうとまれては、必ず国家を失う故、祈りも詫び言いしても其の罰はまぬかれ難し。

―故に神の罰、主君の罰よりも臣下万民の罰は尤もおそるべし。（傍線は筆者）

書籍は445頁（厚さ3㌢）。読むには少し時間がかかる。前評判が高かったため、市立図書館では蔵書数を増やしたが、貸出予約者は直木賞の発表後に200人以上になったとか。

城内で起こる奇怪な事件については、最終章で秘密が明らかにされる。伊丹が舞台となった本格ミステリーを、ぜひ楽しんでほしい。

（郷土史研究家　森本啓一）

伊丹俳壇

「みかん」坪内稔典　選
（佛教大学・京都教育大学名誉教授。柿衞文庫理事長）

最優秀賞

「青春と読書」みかんの香の指に　井上　鈴野（東京都東大和市）

「青春と読書」は集英社のPR誌だが、話題が豊富、しかも本屋の店頭で無料でもらえる。私も以前にこの雑誌で対談した。この句、いかにも本好きな人の姿が目に浮かぶ。「青春と読書」が俳句になったのは初めてかもしれない。

優秀賞

嘘なんていけませんよと蜜柑むく　野上　卓（東京都世田谷区）

幸福度百％蜜柑美味　藤田　晋一（宝塚市）

赤子抱く蜜柑のかほり爪に残して　夏の椿（尼崎市）

ほめられてみかんの色に蜜柑山　平　きみえ（伊丹市）

蝶々の教へてくれし蜜柑挽ぐ　山田　信子（伊丹市）

伊丹歌壇

「再会（テーマ詠）」尾崎まゆみ　選
（「玲瓏」選者。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員）

最優秀賞

気まずさの解ける時のゆるやかさ　白きレースが空気を含む　渡邉　知博（岐阜県揖斐郡）

再会した時の気まずさがゆるやかに解けて、以前の関係に戻る。心がふわっと膨らむような感じを、白いレース（カーテンだろう）が繊細に伝えていて、テーブルを挟んで坐っている人の姿まで見える。

優秀賞

訳本を探しています諳んじた「ぼくのキツネ」のあの一節の　煤馬（群馬県佐波郡）

ゆきやなぎ南北にのび東京を捨てたときいた君がベンチに　井上　鈴野（東京都東大和市）

石段をグリコとのぼる背なを追い子ども時代のリピーターとなる　菅澤　真央（神戸市東灘区）

オンライン初めましての三日後に地元の駅で再び会った　噂野アンドゥー（伊丹市）

ワクチンを打つまで会わない約束の父母が捨ててきたマスクの数よ　芍薬（千葉市美浜区）

次回の兼題は、俳壇は「噴水」、歌壇は「仕事」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は5月15日（必着）。最優秀賞には図書券千円を進呈。下のQRコードを利用すると、スマートフォンからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。

伊丹商店街シリーズ④
サンストア商店会
地域との連携や交流を目指して

サンストア昆陽商店会は、イズミヤ昆陽店（池尻1丁目）の入口正面に並ぶ病院、八百屋、喫茶店など9店舗で構成されている。同商店会は、イズミヤの関連施設として「サンストア」と命名され、事業者が共同所有物を管理する目的で設立された。

会長の大谷貞之さん（74）＝写真左＝は、ピザとコーヒーのお店「茉茹莉茄（マンジョリカ）」を昭和51年（1976）4月に開店し、創業45年を迎える。店名の由来は、イタリアの錫釉（すずゆう）色絵陶器のマジョリカ焼きだ。店主と共にお店を経営するのは、息子の大谷有司さん（39）＝写真右＝。

昭和レトロな家具や厨房の食器、本棚に並ぶコミックを眺めていると懐かしい気持ちになる。注文後に生地を伸ばし焼かれる本格ピザと丁寧に焙煎されたコーヒーが人気のメニューだ。この他、サンドイッチ、カレー、焼きそばなど食事のメニューも豊富で、買い物や通院に訪れた人々のお食事処として利用されている。

同商店会について、大谷会長は「開店当時は、イズミヤの関連施設としてスクラッチカード店舗に参加するなど賑わっていたが、今はそのような取り組みがなくなっている。商店会として共同所有物の管理だけでなく、地域住民や他の事業者との連携や交流、広報にも力を入れていきたい。できれば若い世代に託したい」と話す。

尼崎市と隣接した同商店会には、近隣他市の顧客も多い。他市と協働で市境のない商店会の活性化に向けて、若い世代が動き出すことに期待したい。

（KUMI）

池尻1丁目30番
8時～19時　水曜定休
☎072・779・6844

同店のInstagramはこちら

現代人物風景

みんなそれぞれの個性で輝いて！！

写真協力＝西田写真館

伊丹市少年少女合唱団
川端宏枝さん（44）

市内在住の小学3年生から高校3年生までの約50人で構成される伊丹市少年少女合唱団。「歌は心のハーモニー」をモットーに、音楽を通した情操教育を大事にしている。その指揮者を務めるのが、川端宏枝（かわばたひろえ）さんだ。

川端さんは、小学4年生の時、伊丹小学校へ転校。最初にできた友達に誘われコーラス部に入部し、恩師となる顧問の菱本清子（ひしもときよこ）先生と出会った。

入部後は朝、昼、放課後と練習漬けの毎日が始まった。菱本先生の指導は厳しかったが、部員一人ひとりに愛情をもって接する先生に憧れた。そして、中学1年生の時に先生が指揮者を務める合唱団へ入団した。

コーラス部の時とは違い、年上の先輩や他校の同級生に囲まれ、練習に励む日々。その中で、先輩方のように声楽を志したいという思いが強くなり、大阪音楽大学へ進学した。その後、数々のオペラにソリストとして出演しながら、同合唱団に携わってきた。

32歳の時に指揮者として着任し、日頃から団員には挨拶や感謝の言葉をしっかり言うこと、練習場は来た時より美しくするなど「当たり前のことをきちんとする」ことを大事に指導している。また、皆で何かをやり遂げる達成感を感じてもらうために、演奏会のプログラムや振付、衣装の選定などは団員が自主的に取り組んでいる。こうした活動を通じて、自分が輝けるものを見つけ、自信を持ち、舞台で一人ひとりがキラキラ光ってほしいと話す。

毎年3月には、1年間の集大成となる定期演奏会を開催している。

伊丹市少年少女合唱団は優しく楽しい仲間と一緒に、舞台で輝ける自分と出会える場所だ。入団に関する詳細は、合唱団育成会事務局までお問い合わせを。

伊丹市少年少女合唱団の詳細はこちら

郷土土産品紹介
あなたの夢をデコレーション

桜台小学校近く、明るい子どもたちの声が響く中にある可愛い外観の人気洋菓子店『お菓子のメリメロ』。店に入ると可愛い動物の人形たちがお出迎えしてくれ、まるでおとぎの国にでも迷い込んだかのようだ。

店主の堀口忠司（ほりぐちただし）さん（57）＝写真＝は、伊丹生まれ伊丹育ち。宝塚ホテルのパティシエとして18年間勤務し、平成12年（2000）に、中野西に同店を出店した。

お菓子へのお客様の様々なニーズに対して「たくさんのお菓子がありますよ」というニュアンスを醸し出すため、フランス語で「てんこもり・たくさん」を意味するメリメロを店名にしたそうだ。店名どおり、同店の焼き菓子は種類が豊富で、進物用を意識して作られている。一つひとつが優しい素材から出来ており、パティシエの愛情がメリメロ（たくさん）込められている。

中でも注目して欲しいのは、創作性豊かなデザインのデコレーションケーキ（直径12センチ、税込2千円～）だ。有料ではあるが、チョコレートプレートに要望に合わせたイラストを描いてくれるサービスがある。キャラクターはもちろん、子どもたちが描いたイラストをそのままプレートに再現してくれる。その他、フルーツの量も好みに合わせて調節できる。

桜台小学校の近くにお店があることから、子ども1人でも気軽にお店に入れるよう、シュークリーム110円～（税込）等、お小遣いの範囲内でお菓子が買える価格設定も魅力の一つである。

堀口さんは、「これらのサービスを通して、子どもからお年寄りまで愛される洋菓子店を目指したい」と意気込む。

夢のあるお菓子をぜひ一度味わってみて欲しい。あなたもおとぎの国の主人公になれるかも？

（米田　ともこ）

中野西4-30-103
9時～20時、木曜定休
☎072・779・3039

老舗探訪

森永牛乳伊丹販売店
☎072-770-2829
正月三が日以外 年中無休

猪名野神社境内入口前の牛乳販売店「森永牛乳伊丹販売店」をご存じだろうか。

小さな店舗ではあるが、歴史は長く昭和2年（1927）頃に宮ノ前に出店。五代目店主の穴田守さん（79）と妻の英子（えいこ）さん（75）＝写真＝の2人で経営している。市内への配達販売が多く、高齢客に配達へ行くと、買い物を頼まれることもある。また、玄関に置いた商品が、次の日になってもそのまま置かれている等、異変を感じた時は、地域の民生委員へ連絡をして事なきを得たこともあったそうだ。毎日の配達が見守りの役割も果たしており、地域に密着した牛乳屋さんだ。

お店の中に入ると、まず赤い扉の冷蔵庫が目に入る。定かではないが現在の店舗ができた頃に設置されたようで、扉は木製で周りはタイルやセメントで覆われている。昔は水冷式だったが、阪神・淡路大震災を機に、空冷式に変更したそうだ。震災時はこの冷蔵庫が支えとなり、家の倒壊を防げたそうで、まさにこの店舗の大黒柱だ。

歴史ある牛乳屋を営む穴田さんは「無茶なことはせずに、まじめに働くこと。それが積み重なり、ここまで長く商売を続けることができた。この先いつまで続けられるか分からず、将来的には店を閉めることも考えているが、人との出会いが生まれる配達は楽しい」と語る。

将来的には、歴史的価値がありそうなこの冷蔵庫を、どなたかに譲りたいと考えているそうだ。猪名野神社を訪れる時には、同店にも目を向けてみてほしい。

（細尾　哲也）

365日昆陽池公園を見守る

昆陽池公園野鳥観察グループ『チームK』

市民にとって憩いの場である昆陽池公園。ここを拠点に活動する『チームK』に注目したい。

代表を務める尾崎雄二さん（56）、由紀さん（57）夫妻は、野鳥を見るのが共通の趣味だった。これまでも全国各地に探鳥旅行をしてきたそうだ。

ある日、由紀さんが近所の同公園を歩いていると、20羽を超える『オオジュリン』を発見。

チームKは幅広い年代が活躍している

昆陽池公園の環境の変化により、いないと思われていた野鳥がいた事に強い衝撃を受けた。同時に、もっと真剣に探したら色々な野鳥が見つけられ、面白いのではないか。それが、地元の魅力再発見にも繋がったそうだ。

平成27年（2015）3月28日にチームを立ちあげた。スタート時は5人だったが、丸7年経った今では100人を超えた。日本野鳥の会の会員、ウォーキングや散歩に来られていた方など、きっかけは様々だ。

昆陽池公園に降り立ったコウノトリ（写真左）と、繁殖に成功したアオバズク（写真右）＝尾崎由紀さん撮影

市に許可をもらい「昆陽池公園野鳥情報ボード」を同公園松ケ丘入口の売店前に手作りして設置。昆陽池で見られる鳥の名前や写真が掲示されている。わかりやすいと来園者からの評判も上々。ボードの情報は毎日更新している。

これを設置してから野鳥に興味を持つ人が増え、双眼鏡を片手に散歩に来るようになった人も多いそうだ。観察種は年間約140種を記録。昨年までの6年間の総観察種は177種になった。

今年2月19日昆陽池公園史上初の『コウノトリ』が降り立った事が大きな話題に。

チームKのメンバーの1人が1羽を発見。翌日に2羽が合流して合計3羽になった瞬間を雄二さんと由紀さんが目撃した。

ボードの情報を更新する尾崎夫妻

その後多くの人が同公園を訪れ、コウノトリが寛ぐ様子や池の魚など捕食する姿を観察した。これまでも上空を通過する姿は時々あったが、舞い降りたのは今回が初めてだ。

由紀さんがチームKの活動で、最も印象に残っている出来事は、アオバズクの繁殖だ。

平成29年（2017）6月、50年ぶりにアオバズクのペアが渡来したそうだ。

市の許可を得て巣箱を設置。翌年には初繁殖に成功。以降、数々の困難を乗り越えて、4年連続で繁殖に成功している。

チームKのメンバーは、幅広い年齢層が活躍しており、同公園を365日見守り続けている。

その観察データは兵庫県、伊丹市や昆虫館、日本野鳥の会へ日々報告し、同公園の鳥獣保護区としての存続に役立っている。

今後について由紀さんに聞くと、日本の将来を担う若いメンバーの育成を続けていきたい。また、今までの経験を活かし野鳥に関する本を出版するのを目標に、今後も活動を続けていきたいと話してくれた。

（龍田起代子）

林やよい
伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいすまいる」連載中。

元おかみの きまぐれコラム

昭和も昭和の巻き寿司

子どもの頃、桃の節句が近づいてくると、土蔵から雛箱と、なぜか機織機も一緒に出して飾っていた。機織機は母かお婆さんが使っていたのだろう。

思い返せば田畑に桑の木が植えられていた。実は熟れると黒っぽくなり、おやつによく食べていた。もちろん口の中は紫色。弟と舌を出し追っかけごっこを。家の中には蚕がガサガサ、ポリポリと音を立てていた。

人日（1月7日）、端午の節句（5月5日）、七夕（7月7日）、重陽の節句（9月9日）とともに五節句の一つとされるのが、3月3日の雛祭り（桃の節句）だ。故郷では、雛祭りは4月3日と、ひと月遅れだった。

雛箱から出し、家中が手伝って飾るのだ。私は小さかったので、まるで天井まで雛壇があるように感じた。男雛、女雛、三人官女、五人囃子、右近の橘、左近の桜、白酒、あられ、おかき、キャラメル…。そしてちらし寿司を供える。

お餅をつき、おかきやあられを切り、ひと月干して3月3日にはほろほろ、ぱらぱらと炒る。色付けには、干し海老、青のり、くちなし、紅粉を使っていた。

ちらし寿司は「散らす」といって縁起がよくないことから、まぜ寿司や、ばら寿司と名を変えていた。田舎ではなにかと理屈っぽいようだが、現在はガラス雛、二人雛、折り紙雛など、色々な雛飾りがある。

14～15歳になると、4月3日には山へ登った。女の子だけで巻き寿司を持って山の上に行き、山肌が見える場所で滑って遊ぶ。何度も何度も登っては滑り、お腹が空いたら重箱に詰めてある巻き寿司を食べ、夕暮れになるまで何度も何度も繰り返した。

この日は巻き寿司20本巻いた（この頃には母は天国へ）。

巻き寿司の具は、椎茸、玉子焼き、ちくわ、三つ葉、高野豆腐、それにかんぴょうでした。

野良仕事
終えて正座の
雛の客

（平　きみえ）

新たなにぎわい

とうとう、今回が30杯目の「酔後録」となった。顔も知りえぬ大先輩のあとを受けて「伊丹公論」の名物コーナー「酔後録」を執筆させていただいて、もうすぐ足かけ9年になる。感慨深い。

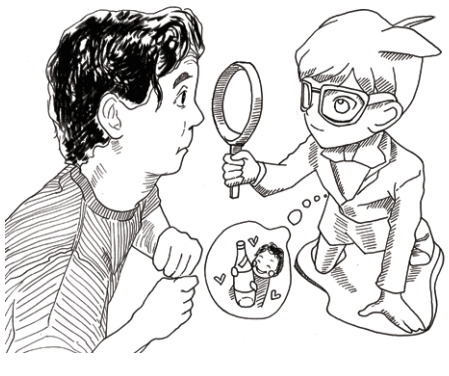
そして4月からは、また新しい年度になり、この伊丹公論を発行している「ことば蔵」の近くに「市立伊丹ミュージアム」がオープンする。詳しくは1面に書かれているが、美術館、工芸センター、柿衞文庫、重要文化財である旧岡田家住宅・酒蔵などがある場所に、新たに博物館機能が加わる。展示も変わり、多くのイベントも開催されるだろう。

かつて、大いなるにぎわいを誇った、この宮ノ前という地区が、また活気を見せることになり、訪れたあとに余韻にひたりながら、近辺の店で呑むのが今から楽しみで仕方ない。

新たな旅立ち

そして拙者、実はこの3月末で今の職場を卒業！するのだ。なんと38年間という長きに渡って務めてきた。

38年…456か月…約1万3千と900日…と、数え出すと本当に長いが、この間にどれだけの酒を呑んだのだろうか（そこ？笑）振り返ると、この酔後録執筆のように好きなことも沢山させていただいた。また、周りの人たちに恵まれたので楽しく仕事ができたんだな、と改めて感じている。

さ、今後フツーの親父に戻れるかどうかは??だが、何となく酒にからんだ仕事もできそうである。長きに渡り頑張った自分に「お疲れさん！」。そして、新たに未知な世界に旅立つ自分におめでとう！の乾杯だ🍷

（ときわ喜多）